

夏、子どもが読みたがる本

松岡享子



子どもたちが愛読する本の世界には、季節による変化や流行は、ほとんど見られません。図書館などで、子どもたちが、自分から手を出して選ぶ本を見ていると、「明けても暮れても……」といたくなるほど、同じ本である場合が多いのです。子どもは、季節や流行によって本を選ばず、また、ほんとうにいい本は季節を選ばず……といえるのかもしれませんが。

しかし、そうはいっても、夏休みに読めばいっそうそのおもしろ味が増すと思われる本も何冊かあります。三〜六歳向きの絵本の中から、思いつくままに、そうした本の例をあげてみますと――

まず、赤い海水パンツをはいたうさこちゃんの姿と共に頭に浮かぶのが「うさこちゃんどうみ」(デイック・ブルーナ文・絵・石井桃子訳、福音館書店、二五〇円)です。とうさんにつれられて海に行つたうさこちゃんが、砂あそび、貝ひろい、水あびと、たのしい一日を過ごすようですが、単純な絵と物語で語られます。自分も海水浴に行った子なら、帰り道くたびれて眠ってしまう主人公

に、実感をもって共感するのではないでしょうか。

海水浴といえば「うみべのハリー」(ジーン・ジオン文、マーガレット・プロイ・グレアム絵、渡辺茂男訳、福音館書店、四〇〇円)も忘れることができません。「どろんこハリー」で、ハリーにおなじみになっている子どもなら、必ずや、この愉快な子犬との再会を喜ぶことでしょう。

同じ海でも、港を見た子には、「ビー、うみへいく」(瀬田貞二文、山本忠敬絵、福音館書店、二八〇円)がたのしめるでしょう。外海にあこがれる遊覧船ビーの気持や体験は、そのまま子どもの気持や体験につながります。

山や田舎に出かけた子どもたちは、「くいしんぼうのはなこきん」(石井桃子文、中谷千代子絵、福音館書店、三八〇円)や、「いぬとにわとり」(石井桃子文、八島光子絵、福音館書店、三五〇円)の世界に、いっそう親しみをおぼえるようになりましょう。二作とも、はつきりと夏のものではありませんが、春から夏

へかけての明るさと、さわやかさにあふれた絵本です。

夕立に雷は夏のもですが、雷のあった日の夜など、親子して「へそもち」(渡辺茂男文、赤羽末吉絵、福音館書店、二五〇円)を読むたのしきは、また格別でしょう。好物のおへそをとりに地上へやってくる雷の愉快なお話です。科学的に雷を扱ったものは「ぴかっごころごころ」(フランクリン・M・ブランドリー文、エド・

エンバリー絵、山田大介訳、福音館書店、三六〇円)があります。

これは、福音館書店が、昨年から出しはじめた低学年向きの科学書シリーズの一冊ですが、同シリーズの中には「じめんのうえとじめんのした」(三八〇円)「大きいってどんなこと」(三九〇円)「あなたは星の子」(四九〇円)等々、幼い子にもよくわかるよ

夏休みのための読書のすすめ

読書への提案

夏休みは一学期が終わり、ホッとひといきつく時です。講習会・研修会・夏期保育と、はた目にもみるほどひまではないのです。

しかし、ふだん読もう読もうと思っても一日のつかれのためどうしても夜はまぶたがなかくなくなってしまいます。

うに書かれた、すぐれた科学書があります。自然に親しむ機会の多い時に、書物を通して、疑問に対する解答を見つけ、さらに大きな疑問というか不思議がる、心を育てることは、いいことだと思います。

お値段や大きさが手頃で、家中で旅行にも携帯できる図鑑的なものとしては講談社の原色・自然の手帳シリーズ(各四六〇円、「磯の生物」「日本の貝」「昆虫」等)や、保育社のカラーブックス(各二〇〇〜二五〇円、「金魚」「カラー歳時記鳥」等)があり、説明は読めなくても、幼い子は、カラー写真を丹念にながめてはたのしんでいます。

清水エミ子

そこで夏休みに、一さつのみとまった本を読むことを提案します。

一学期の子どもたちをみなおしてみるための尺度になるような本はいかがでしょう。